

感謝胸に「全力プレー」

岩手県大会が開幕

夏の高校野球岩手県大会が14日、盛岡市の県営野球場で開幕した。

昨年より1校少ない73校が出場。開会式で選手宣誓を行った盛岡一高の十良沢健二主将は、「震災で私たちは、野球だけでなく今まで当たり前に行われてきたことの『大切さ』や『ありがたさ』を改めて知ることができました。ふるさと岩手の皆さんに、私たち選手の元気な姿と、最後まであきらめない姿勢を示したい」と力強く決意を語った。県高校野球連盟によると、県内の高校の硬式野球部員は5月末現在で261

4人。震災で死亡したり行方不明になったりした部員はいなかったが、同月末現在

在で少なくとも21人の部員の家族が死亡または行方不明になり、68人の自宅が全半壊したという。順調に進めば24日に決勝戦が行われる。

父の不明伏せて練習

14日の県営野球場での第2試合で福岡工と対戦する専大北上の主将中村晃広君(3年)は、震災で壊滅的な被害を受けた沿岸の大槌町出身。実家は津波で全壊し、5月1日に漁師の父・秀知さん(当時59歳)が遺体で見つかった。祖母も行方不明だ。開会式に臨んだ中村君は「父さんを甲子園に連れて行きたい」と決意を新たに示した。

5月4日の練習前、「父さんが見つかった。いったん地元に戻らせてほしい」と初めて仲間に切り出した。秀知さんの火葬に立ち会ったためだ。父が行方不明になったことは内緒だった。

3月11日は、いつものように岩手県北上市のグラウンドにいた。電話が通じず、家族の安否がわからないまま、「避難所にいるはずだ」



開会式で入場行進する専大北上高校の中村主将(14日、盛岡市の県営野球場で)

と信じて練習を続けた。2日後、「父さんとおばあちゃんが見つからない」と鳥取県の姉から連絡を受けた。だが、自分は主将。「チームを離れられない」と練習に打ち込んできた。仲間たちは主将の父が行方不明になっていることを、知っていたという。だが、普段通りに振る舞う主将の姿に、仲間たちも応えた。副主将の別所彬捕手(17)は「チームを引っ張ってくれた中村と甲子園に行きたい」と話す。

(伊藤大輔)